天が泣く

森野　水琴

雲ひとつ無い晴天から雨が降る。天が泣いているように雨が降る。お天気雨、狐の嫁入りともいわれるが、天泣（てんきゅう）である。

彼は源氏物語の一場面に思いを寄せている。紅葉賀（もみじのが）の巻、光源氏と頭中将（とうのちゅうじょう）が青海波（せいがいは）を舞う場面である。光源氏の舞の美しさに天も感動するかのように時雨（しぐれ）。

天泣を思い描くと、彼には雅楽が聞こえる。天の泣き声にも聞こえる。悠久の彼方から届く調べ。頭の中で雅楽を奏でながら、さらなる高みを目指していく。そのような心持ちで、魂が震えるがままに、したためている時が彼には至福の時である。

彼は詩を詠むのが好きである。歌うかわりに詩吟のように吟ずることもある。

いにしえは　争いも無く
青く澄み渡る　空に響く
美しき　言の葉が　心に沁みて
あふれる想い　したためむ

彼が好んで吟ずる「序歌」である。天にも届けと吟ずる。とはいえ普段は声を出さずにイメージトレーニングしている。脳内に鳴り響く。
ジョギングしながらも出来るのが嬉しい。その時に詠む新たな詩は、リズミカルで力強いものになる。
走り終えて歩きながら詠む詩は、語りかけるようなものになる。

走りながらの脳内発声練習。朝の楽しみになっている。
おごそかな気持ちになれるのも嬉しい。
高みを目指す姿を披露しながら駆け抜ける。
天に届け　天に届け　と走り続ける。

走りながら「花の都」という言葉が彼の脳内に浮かんできた。
かつて電子辞書で調べたことがあって、源氏物語の須磨（すま）の巻に出てくる和歌が元になっているようだ。流罪になる前に自ら須磨に流れていく光源氏を見送る人が詠んだ歌。したがって都は京都になる。

風の便りによれば　天上の紫式部の分身が降りてきたらしい

音を天に届けようとしても途中で消えてしまう。
だからと言って音にしなければ何も伝わらない。
天に届けたいという思いを懸命に伝えていく。
ひとりの音では小さすぎるので、なるべく多くの人で奏でる。
多ければ多いほど天も関心を持ってくれよう。
きょうもまた彼は多くの仲間とともに奏でている。
少しでも早く、天が気づいてくれることを願いながら。

彼の祈りが通じたのだろうか。
いつしか踊り手たちも加わり彼の奏でる音に合わせて舞う。
光源氏の舞には到底及ばないが次第に呼吸が合ってきた。
天から見守られているような雰囲気になり陶酔の宴になっていく。